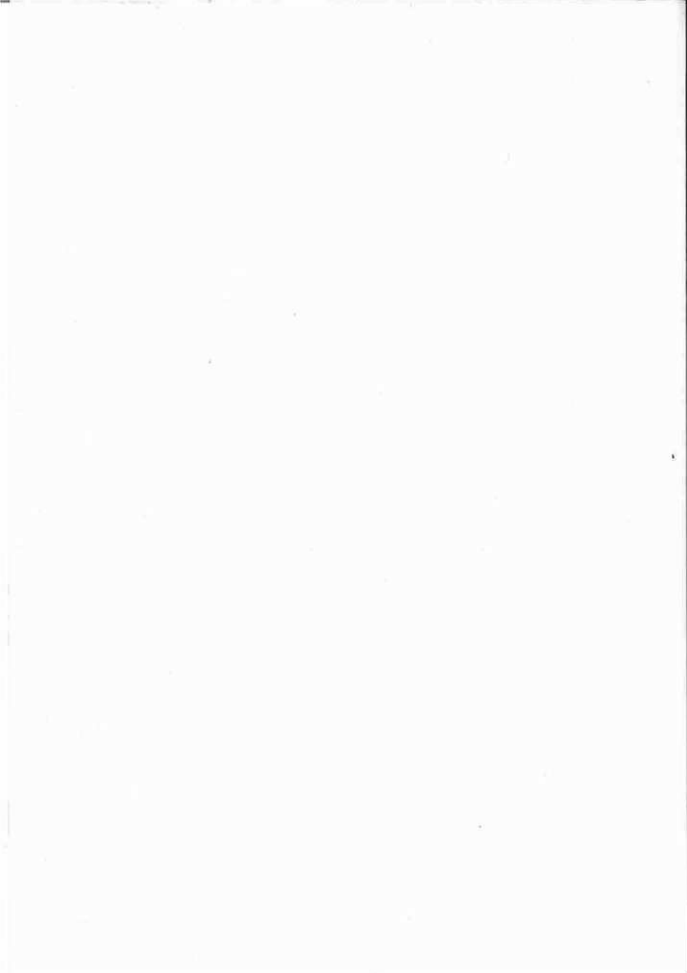


原町市埋蔵文化財調査報告書 第9集

(仮称)福島県立浜通り高等技術専門校
建設関連遺跡発掘調査報告書

—— 巢掛場遺跡 ——



序

文化財は、わが国の長い歴史のなかで生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

これまでは相馬地方の地域開発にはあまり目立った動きはありませんでしたが、近年になって、火力発電所の建設や工業用地の造成などにより、広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方で、わたしたちの祖先が長い歴史のなかで作り、引き継いできた埋蔵文化財が数多く失われつつあります。

このような状況のなか、教育委員会では埋蔵文化財の保護、保存に努めているわけですが、このたび、果掛場遺跡の所在地に福島県立浜通り高等技術専門校が建設されることになり、事業計画上遺跡の現状保存ができないため、やむなく発掘調査を実施することとなりました。

調査の結果、集落は見つかりませんでした。平安時代頃の溝跡6条などが発見され、萱浜地区の歴史の一端を明白なものとなりました。

今後、今回の発掘調査を契機として萱浜地区だけでなく周辺においても文化財の保護のために、また、学術研究のためにお役に立ていただければ幸いに存じます。

おわりに、調査および本報告書の刊行にあたってご指導いただきました福島県教育庁文化課の皆さま、県立原町高等学校の玉川一郎教諭に深く感謝いたすとともに、調査に関係された各位に衷心より謝意を表します。

平成5年3月

原町市教育委員会

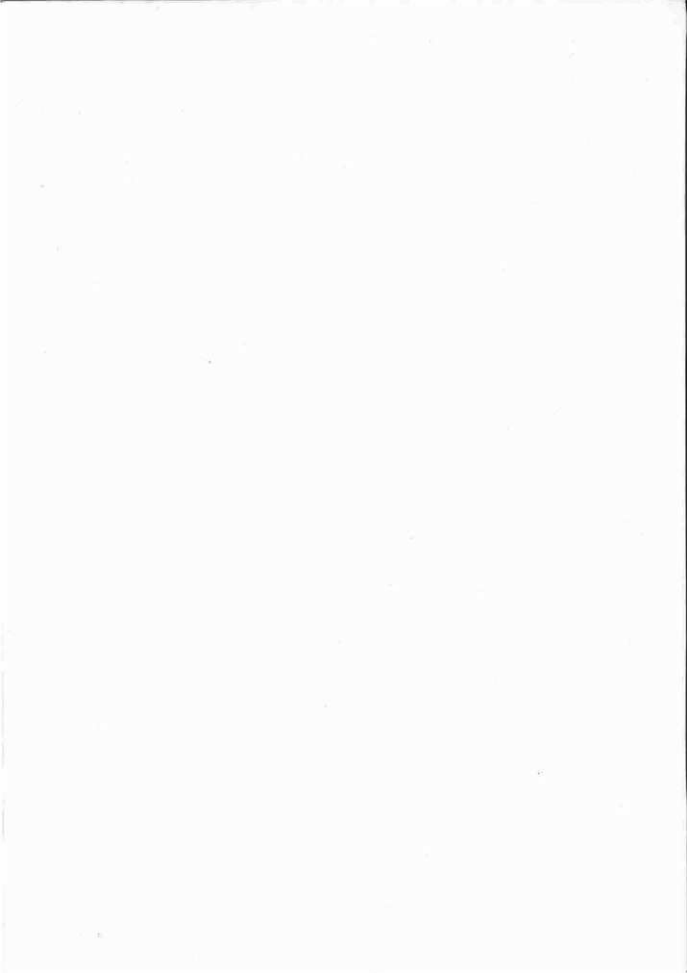
教育長 渡部 秀夫

例 言

1. 本報告書は、平成4年度に原町市教育委員会が実施した福島県立浜通り高等技術専門学校建設にかかる原町市萱浜所在の集掛場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、福島県より委託を受け、原町市教育委員会が主体となり調査を担当した。費用は福島県が負担した。
3. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の機関および個人から指導助言を得ている。
福島県教育庁文化課 玉川 一 郎 辻 秀 人
4. 本報告書の執筆および編集は、原町市教育委員会文化課文化財主事武田耕平、同課調査員斉藤直之が行なった。第1章は『原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ（1991 原町市教育委員会）』の再録である。
5. 調査で得られた資料は、全て原町市教育委員会が保管している。

目 次

序	
例 言	
目 次	
第I章 原町市をとりまく環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第II章 試掘調査	
第1節 調査に至る経過	7
第2節 調査体制	7
第3節 調査経過	7
第4節 調査成果	11
第III章 本調査	
第1節 調査体制	12
第2節 調査経過	12
第3節 調査成果	
第1項 基本層序	13
第2項 溝 跡	13
第3項 土 坑	21
第4項 焼 土 跡	21
第5項 遺構外出土遺物	21
第IV章 ま と め	28
参考文献	



第I章 原町市をとりまく環境

第1節 地理的環境

福島県原町市は、浜通り地方のいわゆる阿武隈高地東縁部東部の低地帯北方、相馬地方のほぼ中央に位置しており、東は太平洋に面し、行政境としては北は相馬郡鹿島町、南は小高町、西は飯館村・双葉郡浪江町と境界を接している。人口は約49,000人、面積は約199.66km²で、当地方の産業及び政治面での中核都市となっている。主要交通網は、南北方向に縦走するJR常磐線と国道6号線であり、仙台方面や市内などへの通勤・通学手段として利用されている。

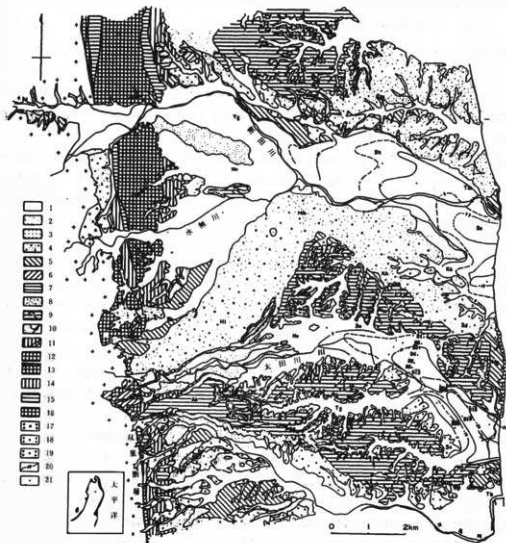
原町市の地形は、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵・常磐丘陵と称される標高100m以下の低丘陵、及び丘陵間に開析された沖積平野とで構成されている。全体として阿武隈高地にかかる西側が高く、東部に行くにつれて標高を下げている。阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯とは相双断層（岩沼-久之浜構造線）によって地質的に明瞭に区分され、低地帯もまた断層以東の相双丘陵地域と以南の常磐丘陵地域とに区分されている。

阿武隈高地は東西約50km・南北200kmの規模を有し、古生代から新生代中頃の第三紀中新生に至る地質を有し、北上高地と並ぶ日本最古の地質構造を呈している。基盤層は古生代末期のアパラキア褶曲と中生代末期のララマイド褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期及び新期・最新期の花崗岩、変成岩類である。地形的には山頂がなだらかな隆起準平原を呈しており、原町市付近の標高は500～650m前後になっている。

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された固結度の低い凝灰岩質砂岩で構成されており、双葉断層により、上層部の相双丘陵（滝の口層）と中・下層部の常磐丘陵地域とに区分されている。高地周辺では標高100～150m前後を測り、東延するにしたがって徐々に高度を下げ、海岸部では20～30mを測る。第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動により、丘陵上には海成及び河成の段丘が構成され、高位より順に第1段丘、第2段丘、と命名されている。原町市内では埋没段丘を含む7段丘の存在が知られており、特に第1段丘である畦原段丘と第4段丘である雲雀ヶ原扇状地が発達しているが、他は河川上流域沿いに小規模に分布しているといった在り方を呈している。

低丘陵の間には、各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。標高は20m以下であり、縄文時代前期を中心とする海進期には海岸部の大部分が海水面下にあったと考えられており、大木2a式期の遺跡である蜷貝の赤沼遺跡の調査では、海水面を標高6m前後に求めている。現在では圃場整備が進み、一面の美田地帯が形成されている。

第1節 地理的環境



1: "沖積層", 2: 第6段丘構成層, 3: 第5段丘構成層, 4: 第4段丘構成層, 5: 第3段丘構成層, 6: 第2段丘構成層, 7: 第1段丘構成層, 8~11: 亀の口層, 8: 同c層 (砂岩), 9: 同c層 (シルト岩・京塚沢凝灰岩), 10: 同b層, 11: 同a層, 12~19: 基盤岩類, 12: 塩手層, 13: 小山田層, 14: 富沢層, 15: 中の沢層, 16: 新窪層, 17: 古生層, 18: 花崗岩類, 19: 脈岩, 20: 亀の口層上面標高(m), 21: ボーリング地点と孔番, Ah: 畦原, Bb: 馬場, Hi: 雲雀ヶ原, Hm: 原町市街, Ht: 東高松, Ka: 香浜, Kh: 北原, Kk: 片倉, Mg: 間杉沢, Mm: 米々沢, Nn: 長野, No: 中太田, Om: 大饗, Sd: 雫, Se: 下江井, Sk: 下北高平, So: 下太田, Se: 下流佐, Tb: 塚原, Tg: 鶴谷, Tm: 熊前, Yg: 横上

第1図 原町地域の地質図(中川他 1979 原図)

第2節 歴史的環境

最近の原町市では、火力発電所建設や海浜リゾート計画であるCCZ建設などの大規模開発が推進されており、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査により、従来不明であった弥生時代の遺跡の在り方や、浜通り低地帯における律令期の政治動向を究明する一端となるような多大な成果が続々と報告されてきている。原町市では、これまでも分布調査や発掘調査を通じて遺跡の保存・活用を努めてきたが、今後増加の一途をたどるこれらの遺跡に対して、尚一層の保存・活用の努力が求められているところである。

旧石器時代の遺跡は遺物の出土する散布地が9ヶ所知られている。立地条件を概観すると、畦原A遺跡、熊下遺跡、袖原A遺跡などは太田川流域の第1段丘面の畦原段丘上に所在し、陣ヶ崎A遺跡、西町遺跡、橋本町A遺跡などは第4段丘面の雲雀ヶ原扇状地に所在している。

縄文時代の遺跡は早期末から前期初頭の住居跡の調査が行なわれた八重米坂A遺跡、隣接する羽白B遺跡などが阿武隈高地裾部に所在している。前期初頭の大木2a式の土器片が多量に出土した赤沼遺跡は雲雀ヶ原扇状地の先端部の微高地上に所在しており、該期の古環境を知る上での貴重な成果を上げている。中期の遺跡は新田川流域の第3段丘面上に所在する高松遺跡周辺から西側の平坦面一帯が、末葉の大木8a～10式土器片を出土することで知られている。後期から晩期の遺跡は、大洞C1～A式期土器片を出土した羽山遺跡など多くの遺跡が市内各地に所在している。浜通り低地帯の海岸部には多くの貝塚が所在しているが、原町市では全く確認されておらず、現在まで空白地帯となっているが、今後発見される可能性を秘めている。

弥生時代の遺跡は、東北地方南部の標式土器として使用されてきた中期末葉の桜井式土器を出土する桜井遺跡が知られていたが、最近の調査では、海岸部の丘陵の尾根部に小規模な集落を構成していた例が多く報告されている。

古墳は、前方後方墳として東北第2位の規模を誇る桜井古墳が新田川南岸の河岸段丘上に所在しており、周辺の古墳と共に桜井古墳群を構成している。桜井古墳は昭和58年に範囲確認調査が行なわれており、幅約11.20mの周溝が巡っていたことが確認されている。他に、昭和40年に高の高林古墳群、昭和42年に中太田の与太郎内1号墳、桜井の高見町1号墳の発掘調査が行なわれ、高見町1号墳からは粘土施設を伴う割竹形木棺の痕跡が確認されている。この他にも、市内各地の丘陵上に古墳が築かれており、北泉の地藏堂古墳群、江井の西谷地古墳群、小木迫の五治郎内古墳群などが所在している。

後期になると、当地方でも横穴が多く作られている。現在確認されている分布状況をみると鹿島町との境に近い新田川北部の上北高平に北沢横穴群、京塚沢横穴群、新山前横穴群、北泉に大磯横穴群、地藏堂横穴群、太田川北部の上太田に道内迫横穴群、大甕に西迫東迫横穴群、零に坂下横穴群などが河川流域の沖積平野を望む丘陵に所在しており、古墳の分布の在り方とほぼ合致している。また、中太田の中畑横穴群、羽山横穴群、上太田の新橋横穴群は、雲雀ヶ原扇状地を望む丘陵に所在している。この内、昭和48年に発掘調査が行なわれた国指定史跡の羽山横穴は、玄室奥壁に壁画が描かれており、調査後に保存処理を施して年間8回の一般公開を通して社会教育に役立っている。

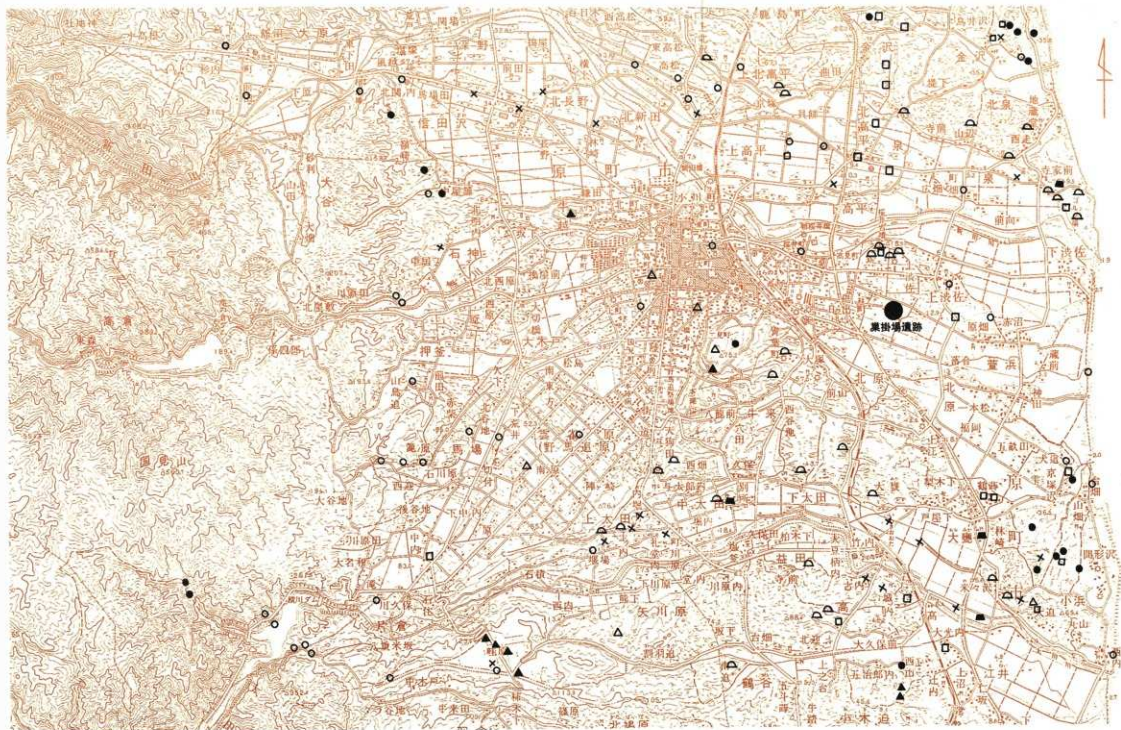
奈良・平安時代の遺跡は、律令体制のもとに行方郡家に擬定される泉慶寺跡や軍団跡に擬定される植松庵寺跡が新田川北川の丘陵裾部に所在している。この遺跡からは布目瓦が出土しており、供給源として泉慶寺は大甕の京塚沢瓦窯跡が、植松庵寺は昭和59年に発掘調査が行なわれた入道迫瓦窯跡が考えられている。また、海岸部の金沢の丘陵の一帯には大規模な製鉄遺跡が所在している。平成元年度から勘

県文化センター遺跡調査課により発掘調査が進められており、木炭窯・製鉄炉・住居跡などの遺構を通して、古代の鉄生産に関する技術や生活形態などを知る上で多大な成果が報告されてきている。

この時期になると、土師器や須恵器が出土する集落が増え、新田川や太田川流域の河岸段丘の平坦面、あるいは自然堤防上など、これまで遺跡が少なかった平野部の微高地にも多くの遺跡が立地している。特に延喜式内社の押雄神社・冠嶺神社を中心とする北長野一帯、多珂神社・日祭神社を中心とする大甕一帯、太田川中流域の上太田一帯、桜井の河岸段丘面に多く所在しており、全体として、かつての野馬追原を取り囲むような立地構成をしている。

中世の遺構として城館跡が挙げられるが、信田沢の内城のように現在では所在地不明のものや城館の構造が不明確のものも多い。その中でも、北泉の泉館跡は、中世山城の典型的な形態をとどめている。館主は相馬氏の一族の泉氏の館跡といわれ、その重要性から市指定史跡となっている。他にも、牛越城跡・大甕七館の一つである明神館跡・奥州下向の際、最初に相馬氏の拠点となった別所の館跡などが比較的良好な中世山城の形態を残しながら所在しており、在地の領主の館跡も丘陵上や平野部の各地に点在している。

近世の遺構として、初頭期の慶長2年から同8年に相馬氏の居城として再整備されて使用された牛越城跡や中期初等の寛文6年以降に築かれた野馬土手及び出入口となる木戸跡が所在している。野馬土手は、平安時代以降行なわれてきた野馬追いに欠かせない野生馬の保護に力を尽くしてきた結果、増殖した馬が畑の作物を荒らしたり、放散しないように雲雀ヶ原扇状地を囲むように築かれたものである。大部分は土塁であるが、石垣になっていた所もある。現在ではそのほとんどが消滅してしまっているが昭和62年の桜井野馬土手の範囲確認調査では、土手の規模と内側に溝を掘っていた状況が確認されている。木戸跡は、多い時で三十数ヶ所が設けられていたといわれているが、現在その姿をとどめているものは市指定史跡の羽山岳の木戸跡一ヶ所だけとなっている。



第2図 原町市内主要遺跡分布図

△石器 ○古文 □弥生 △古墳 ×奈良・平安 ▲中世・その他 ●縄文遺跡

第Ⅱ章 試掘調査

第1節 調査に至る経過

平成4年6月17日、原町市長より原町市萱浜字巢掛場45-76（後に45-112に分筆）地内に建設予定の（仮称）県立浜通り高等技術専門学校造成予定地（面積44,107㎡）について、埋蔵文化財有無の照会があった。

当該地番については原町市内の遺跡台帳には記載がないため、同年6月20日、現地の表面調査を行なったところ、石礫や須恵器が散布していることが確認された。

市教育委員会では、文化財保護法第57条の規定により、文化庁に遺跡発見の通知をする一方、窓口の市企画調整課及び担当の福島県職業能力開発課と遺跡の保存協議を行ない、遺跡の範囲や内容を把握するための試掘調査を7月6日から実施することとなった。

遺跡名は小字名をとって「巢掛場（すかけば）遺跡」とした。

第2節 調査体制

1. 調査主体及び担当 原町市教育委員会

2. 発掘作業員

阿部 定雄	課佐 忠夫	根本 友彦	渡辺 辰男	佐藤 徹	押野己之助
池崎スエ子	佐久間三雄	高藤トヨ子	西内みさ子	鶴蒔 秀子	門馬 孝枝
伏見 芳子	林崎 喜一	太田 ミツ	門馬シヅイ		

第3節 調査経過

表面調査では、石礫、須恵器が開発予定地全体に少量散布していたため、縄文時代及び平安時代の遺跡で、その密度は疎であると予想された。

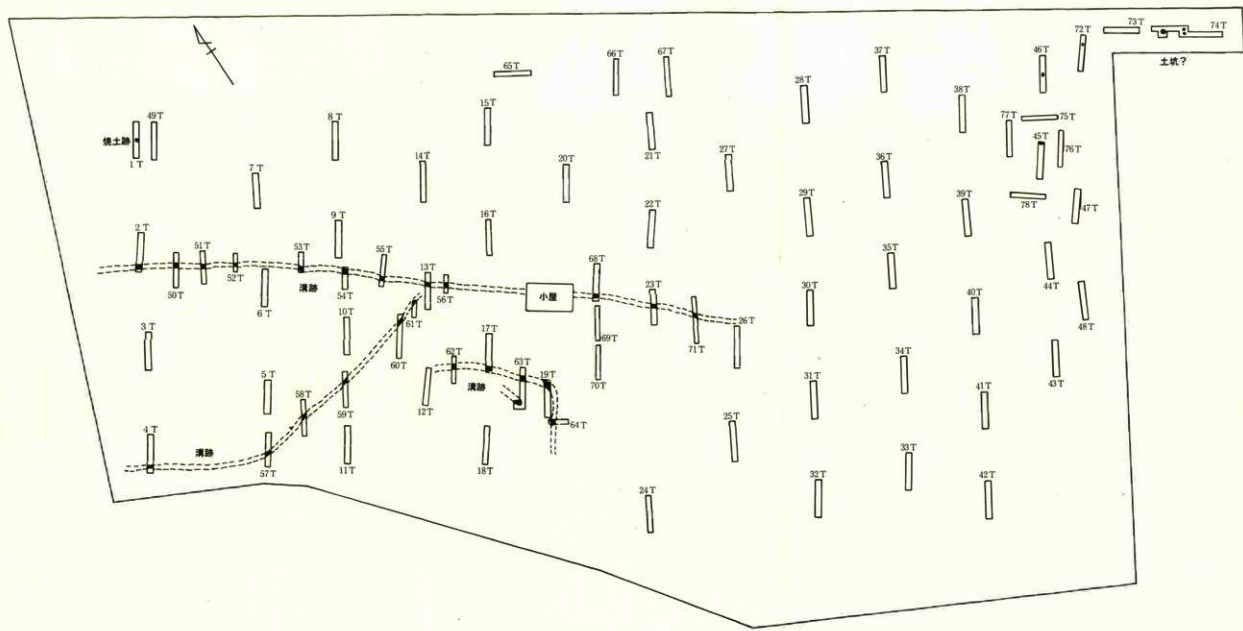
遺跡の広がりを把握するため、1.5×10mの大きさを基本に開発予定地全体にトレンチ（以下「T」と略す）を設定した。その過程で1Tから焼土跡、2、4、12・13、17、19、23Tから溝状の遺構、45・46Tから土坑状の落込みが検出されたため、遺構分布の広がりが方向を確認するために、これらの周辺に追加してトレンチを入れた。

最終的にトレンチは78本を数え、調査面積は1,017㎡に達し、開発予定面積に対する試掘率は2.3%であった。

調査期間は平成4年7月6日～7月25日。



第3図 位置図



第4図 試掘トレンチ配置図

0 20m (1/1000)

第4節 調査成果

調査の結果、溝跡3条、焼土跡1ヶ所、土坑6基を検出した。トレンチからの出土遺物はなかったが、調査中に行なった表面調査により、縄文土器、石鏃、土師器、須恵器が少量採集できた。

基本層序は、第1層(L I)の表土が約30~40cmで、表土直下は大半のトレンチで暗褐色土または黄褐色土となるが、暗褐色土の分布は部分的で全てのトレンチからは確認できない。暗褐色土のあるトレンチでは、その下位に黄褐色土が検出される。

調査区の南側に設定した18、24・25、32・33Tでは表土を除去すると黒色の粘質土となる。黒色土層の厚さは20~60cmと場所によって異なり、32・33Tでは湧水がみられるため、現地表面は平坦であるが、元来は調査区南端から下ってゆく地形だったと想定される。また、検出された溝跡の堆積土の最上層は黒色土を基調としていることから、全体として第2層(L II)黒色土、第3層(L III)暗褐色土、第4層(L IV)黄褐色土の層序となる。なお、経費の制約もあり、十分ではなかったが、3、7、15、29、31、34、37、39・40、45・46Tでは部分的にL III、L IVを30~50cmほど掘り下げ、旧石器時代文化層の有無の確認を行なったが遺構、遺物は発見されなかった。

遺構の時期は基本層序と採集遺物から、溝跡は平安時代、土坑の堆積土は暗褐色土であるため縄文時代ごろと推定される。焼土跡は、検出面はL IIであるが時期は特定できない。なお、58~61T検出の溝跡の堆積土は暗褐色土であるため、他の溝跡とは時期を異にすることも考えられる。

以上より、本遺跡は縄文時代、平安時代の遺跡で、その範囲は焼土跡の検出された北西部から、溝跡のある南西部分と、土坑の発見された北東部分で、遺構密度は低いと想定され、これらについては工法上の対応も含め、保存が望まれた。

第Ⅲ章 本 調 査

第1節 調査体制

1. 調査主体及び担当 原町市教育委員会

2. 発掘作業員

阿部 定雄	諏佐 忠夫	根本 友彦	渡辺 辰男	佐藤 徹	押野己之助
池崎スエ子	佐久間三雄	高藤トヨ子	西内みさ子	鶴崎 秀子	門馬 孝枝
伏見 芳子	林崎 喜一	太田 ミツ	門馬シヅイ	木村 正	紺野 昭義
松本 セツ	山田 春雄	館山 利正	橋本サツ子	佐々木先江	
整理作業員					
寺内美智子	山本 恵子	遠藤 和子	太田 正子	古谷 洋子	

第2節 調査経過

試掘調査の結果をもとに、原町市教育委員会と市企画調整課、福島県職業能力開発課との間で協議した結果、工事計画上遺跡の現状保存は困難であるとの結論に達し、発掘調査を実施することになった。この時点では調査後の整理作業、報告書作成は次年度事業とした。

調査期間及び面積については、遺構密度が低いこともあり、平成4年度における他の発掘調査や造成工事との兼ね合いから、試掘調査で括られた遺跡範囲の全面調査ではなく、検出された遺構を対象として調査を進めるというたいへん苦しい対応を迫られることとなった。

平成4年9月17日、県立浜通り高等技術専門学校（仮称）建設事業に伴う果掛場遺跡の発掘調査委託契約書を福島県知事 佐藤栄佐久と原町市長 門馬直孝との二者で締結した。

委託期間平成4年9月21日～平成5年3月25日。

9月21日より発掘調査を開始した。その経過は以下のとおりである。

9月21日～25日 バックホーによる表土除去、遺構検出作業の結果、試掘調査で検出された溝跡以外の部分からもその延長や新しく溝跡が見つかる。コの字形のものを1号溝跡、調査区中央を東西に走るものを2号溝跡、南西にあって東西に走るものを3号溝跡、3号溝跡東端から北東方向に延びるものを4号溝跡、1号溝跡北西角から2号溝跡に対して直角方向に向うものを5号溝跡とする。1号溝跡から須恵器短頸壺、甕破片出土。

9月28日～10月3日 1～4号溝跡掘り下げ。2号溝跡から須恵器、石鏡、4号溝跡から土師器、弥生土器(?)出土。調査区北東で確認された土坑は堆積土がLⅢで形状が整っていないため遺構と判断せず。

10月5日、8日 1号溝跡に関連した建物跡の有無確認のため、周辺にトレンチ設定。C4グリッドに焼土跡再確認、1号焼土跡とする。J9グリッドで4号溝跡を切っている溝跡を検出、トレンチを入れ方向を確認、調査区拡張、6号溝とする。溝跡の掘り下げはほぼ終了。

10月13日・14日 5号、6号溝跡に平行する溝跡の有無確認のためトレンチを設定。

10月22日・23日 小屋の東で発見の土坑を1号土坑とする。

11月3日～6日 平面図作成、標高記入など測量。6日突然造成及び道路作り始まる。掘削部分を観察、表土下は1mほどの黄褐色ローム層、その下は砂利層になっている。

11月8日～11日 重機に追われながらの測量。11日調査を終了。

この間、調査対象面積10,000㎡に対する調査面積は3,300㎡であった。

調査終了後、県職業能力開発課より整理作業、報告書作成についても今年度対応の依頼があり、平成5年度以降の事業量を念頭に置きながら、これを了承した。

平成5年2月22日 福島県知事と原町市長との二者で委託変更契約書を締結。

第3節 調査成果

第1項 基本層序

第Ⅱ章第4節の調査成果で述べたように、基本的な土層が全て見られるところはないが、全体的にはLⅠ表土、LⅡ黒色土、LⅢ暗褐色土、LⅣ黄褐色土、LⅤ砂利層の層序となる。

第2項 溝 跡

1号溝跡

遺構 調査区南、やや西寄りに位置し、LⅠ直下で検出した。西側と東側の南に延びる部分は耕作及び建物の基礎により削平されているため本来の形状は不明であるが、調査部分は南に開くコの字形をしている。整った直線ではなくやや蛇行している。西側と東側との距離は、両角部分では28mであるが、南端では35mと南に向かって広がっている。上端幅130～150cm、底面幅40～50cm、深さは最大で56cmを測る。底面での比高差は南東端に比し北東角で13cm、北西角で23cm、南西端で14cm低くなっている。堆積土は黒色土、黒褐色土を基調とし、黄褐色土粒が均一に混ざらるため自然堆積と考えられる。

何らかの建物跡に関連することも考えられたので、溝で囲まれた中及び西側、北側にトレンチを設定したが、遺構は検出できなかった。

遺物 土師器墨書杯1片、須恵器短頸壺1片、甕72片、陶磁器1片、砥石1点、磨石(?)1点が出土した。大半が1からのものである。土師器杯は、ロクロ整形で内面は黒色処理されている。体部下端から底部に回転ヘラケズリを施し、底部中央に墨書がある。

まとめ 性格は不明であるが、時期は出土土師器、須恵器から概ね平安時代前半ごろと考えられる。墨書土器は原町市内における最古の文字資料である。

2号溝跡

遺構 調査区の西側中央から東側南端にかけて約280mの長さがある。LⅠ直下で検出した。掘り方は正確な直線ではなくやや蛇行している。G12グリッドで4号溝を切っている。H17グリッドで1号土坑に切られている。西端で上端幅140cm、底面幅25cm、深さ37cm、東端で上端幅60cm、底面幅25cm、深さ9cmで、東側ほど規模が小さく、浅くなる。底面の比高差は西端に比し、ほぼ中央の1号土坑付近で33cm、東端で91cm低くなっている。堆積土は黒色土、黒褐色土を基調とし、黄褐色土粒

第3節 調査成果

が均一に混ざるため自然堆積と考えられる。

遺物 須恵器瓶3片、甕1片の出土である。

まとめ 性格は不明である。時期は出土遺物も少なく決め手に欠けるが、堆積土の状況など1号溝跡に似通っていることから、ここでは平安時代ごろとしておく。

3号溝跡

遺構 調査区南西に位置しLⅠ直下の検出である。検出した長さは東西方向に34mであるが、掘り方は正確な直線ではなくやや蛇行している。東端は耕作による攪乱を受けており詳細は不明である。西端は調査区外近くでやや南側に方向を変えている。西端で上端幅90cm、底面幅20cm、深さ32cm、東端で上端幅60cm、底面幅20cm、深さ9cmで、東側ほど規模が小さく、浅くなる。底面の比高差は西端に比し、東端で20cm低くなっている。堆積土は暗褐色土、黒褐色土を基調とし、黄褐色土粒が均一に混ざるため自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

まとめ 直線部分は2号溝跡とほぼ平行している。性格は不明である。出土遺物はないが、堆積土の状況が1号溝跡に似通っていることから、ここでは平安時代ごろとしておく。

4号溝跡

遺構 3号溝跡東端から北東方向に向って断続的に約140m延びている。LⅠ直下での検出である。J9グリッドで6号溝に切られており、G12では2号溝に切られている。掘り方は正確な直線ではなくやや蛇行している。南端は耕作による攪乱を受けており詳細は不明である。北端は調査区に延びている。南側で上端幅60cm、深さ10cm、中央で上端幅60cm、深さ14cm、北側で上端幅73cm、深さ10cmで、全体的にはほぼ同じ大きさである。溝断面形は皿状を呈する。底面の比高差は南側に比し、中央で28cm、北側で48cm低くなっている。堆積土はLⅢの暗褐色土を基調とする自然堆積層と考えられる。北側では部分的に黄褐色土粒が混ざっている。

遺物 弥生土器1片、土師器甕1片の出土である。

まとめ 性格は不明であるが、方向、断面形や堆積土の状況が他の溝跡とは異なっていることからこれらとの関連は見いだせない。時期については、重複関係から2号、6号溝跡より古いことがわかっている。堆積土の比較においてはLⅢを基調としているため、LⅡに由来する堆積土をもつ他の溝跡よりは古いと考えられる。

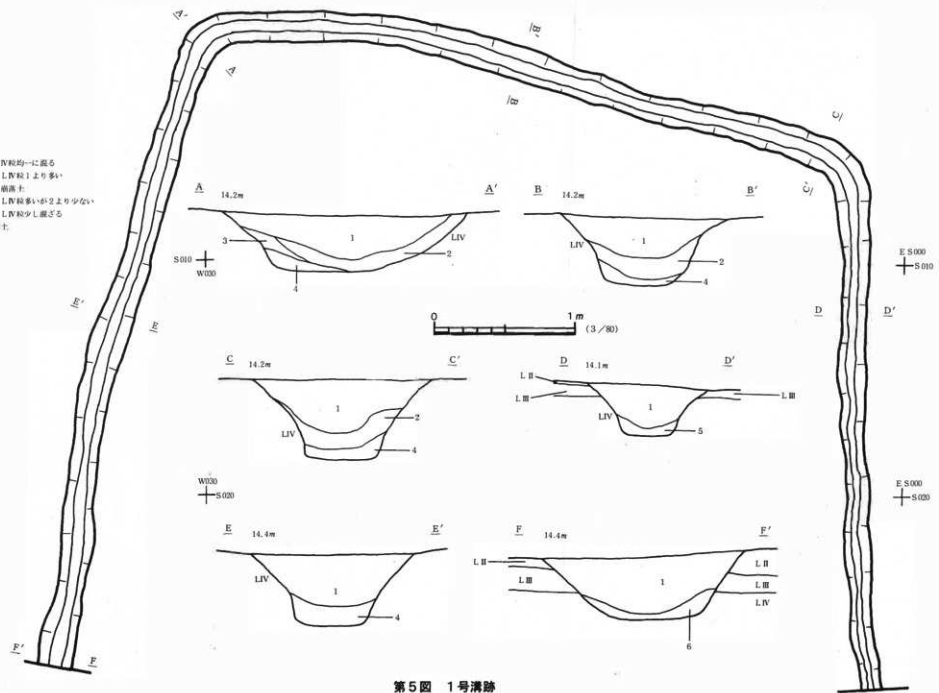
第5号溝

遺構 1号溝跡の北西角から2号溝跡に対し直角方向に19m延びている。LⅠ直下での検出である。掘り方は正確な直線ではなくやや蛇行している。南側で上端幅80cm、底面幅70cm、深さ6cm、北側で上端幅70cm、底面幅45cm、深さ12cmで、全体的にはほぼ同じ大きさである。中央部がやや深く、底面の比高差は中央に比し、北側で4cm、南側で19cm高くなっている。堆積土はLⅡの黒色土を基調とし、黄褐色土粒が均一に混ざるため自然堆積層と考えられる。

まとめ 方向が1号溝跡西側の延長上にあり、2号溝と直行することから、これらと何らかの関連が想定できるが、性格は不明である。時期を決定できる出土遺物はないが、堆積土の状況が1号溝跡に似通っていることから、ここでは平安時代ごろとしておく。

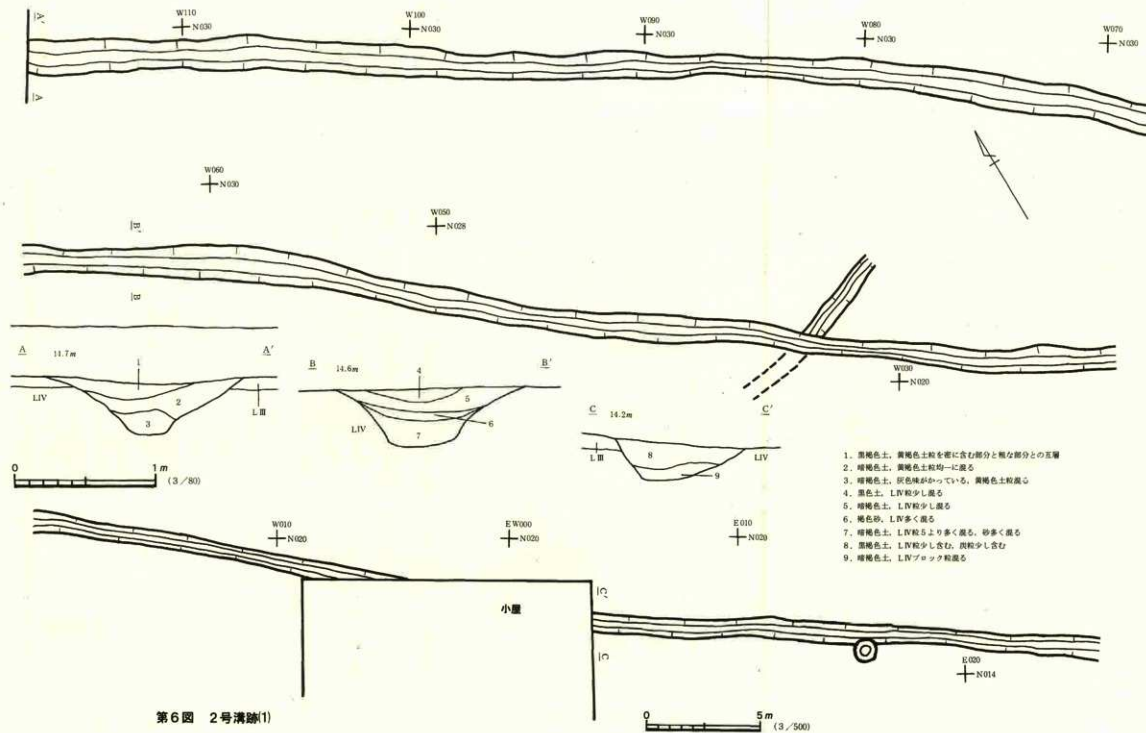


1. 黑色土, L.V.和約一心高5
2. 暗棕色土, L.V.和1より多し
3. 暗棕色土, 粘着土
4. 暗棕色土, L.V.和多いが2より少ない
5. 暗棕色土, L.V.和少し減る
6. 黑色土, 粘土

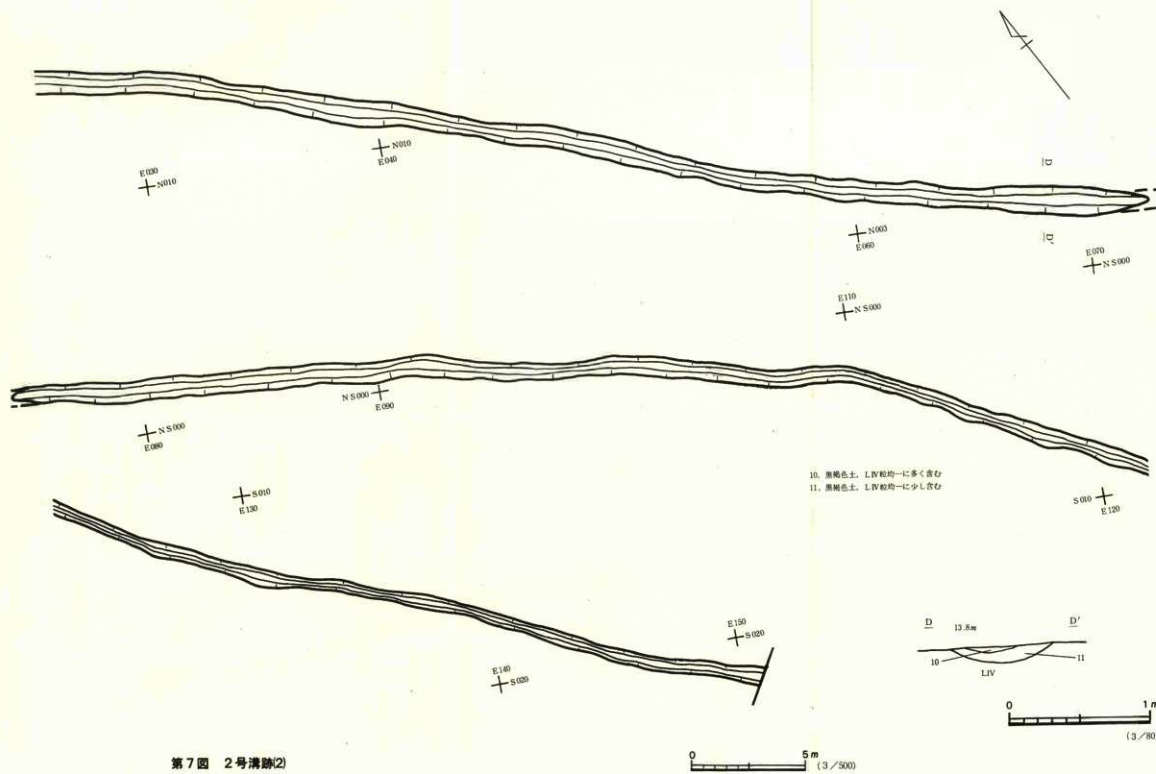


第5图 1号溝跡





第6図 2号溝跡(1)



第7图 2号溝跡②

第6号溝跡

遺構 G9グリッドの2号溝跡の南から、これに直角方向に、5号溝跡と平行に南に50m延びている。L1直下での検出である。J9グリッドで4号溝を切っている。掘り方は正確な直線ではなくやや蛇行している。南端で上端幅70cm、底面幅25cm、深さ11cm、北端で上端幅90cm、底面幅50cm、深さ18cmで、南に向かうほど規模が小さくなっている。底面の比高差は北端に比し中央で7cm、南側で10cm高くなっている。堆積土は黒色土、暗褐色土を基調とし、黄褐色土粒が均一に混ざるため自然堆積層と考えられる。遺物は出土していない。

まとめ 方向が1号、5号溝跡と平行で、2号、3号溝と直行することから、これらと何らかの関連が想定できるが、性格は不明である。時期を決定できる出土遺物はないが、堆積土の状況が1号溝跡に似通っていることから、ここでは平安時代ごろとしておく。

第3項 土 坑

第1号土坑

遺構 H17グリッドのL1直下で検出した。2号溝を切っている。直径110~120cmの円形で、深さは20cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁には部分的に弱い焼けが観察できる。堆積土は黒褐色土の単層で、締まりがなく、黄褐色土ブロック・粒が不均一に混ざっているため、人為的な埋め土と考えられる。径1cm程の木炭が少量混ざっていた。遺物は出土していない。

まとめ 堆積土の状況から比較的最近のものと考えられる。

第4項 焼 土 跡

第1号焼土跡

遺構 調査区北東のL1直下で検出された。大きさは20~30cmで、LIV上に弱い焼け面が形成されている。周辺から遺物は出土していない。

まとめ 性格、年代とも不明である。

第5項 遺構外出土遺物

縄文土器3片、弥生土器1片、土師器杯4片、高台付杯1片、甕4片、須恵器瓶25片、甕27片、短頸壺1片、陶磁器3片、石器10点、刀子(?)2片、動物化石骨2点が出土した。

縄文土器はいずれも小片で時期の特定は困難である。

弥生土器は棒状工具による2本引き平行沈線で山形紋を重層的に描いている。沈線の間隔は2mmほどであり、いわゆる桜井Ⅱ式に比定できる。

土師器杯のうち1片は内外黒色処理された口縁部破片、1片は内面黒色処理された丸底の底部破片である。高台杯1片は両面黒色処理されたものである。

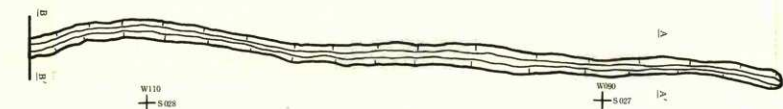
須恵器瓶は頸瓶頸部2片、体部20片、底部3片である。底部片のうち2片は高台が付く破片である。瓶は外面に格子目状のタタキメが見られる。内面はタタキメを擦り消しているものが多いが、青海波紋

第3節 調査成果

のものもある。短頸壺は1号溝跡出土の破片と接合した。

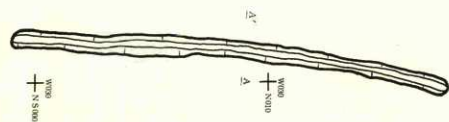
石器は、石鏃3点、削器1点、磨製石斧2片、剥片4点である。石鏃は全て薄身で、やや凹基のもの2点、凸基のもの1点で古手の様相を呈している。

動物化石骨は原町市域でも産出されるクジラのものであろうか。



3号清跡

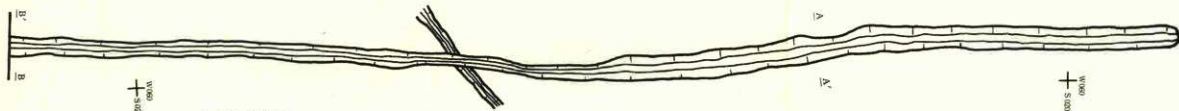
1. 黄褐色土。LIV粒少し混る
2. 暗褐色土。LIV粒少し混る
3. 暗褐色土。LIV粒2より多い



5号清跡

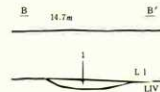
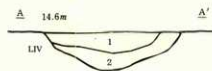


1. 黄褐色土。LIV粒多く均一に混る

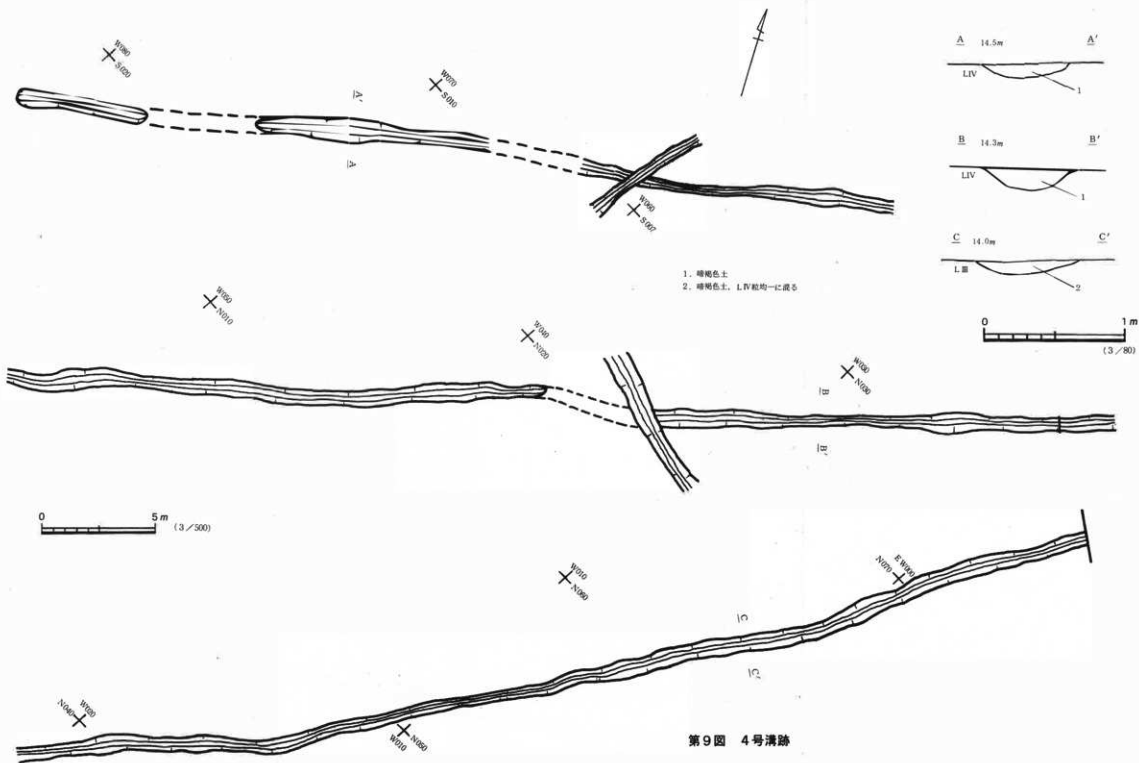


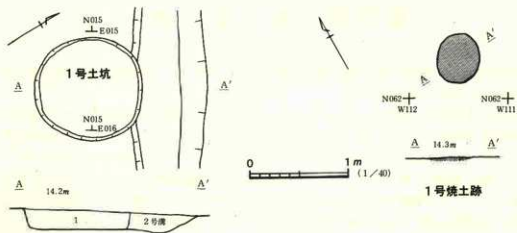
6号清跡

1. 黒色土。LIV粒少し混る
2. 暗褐色土。LIV粒1より多い



第8図 3、5・6号清跡





1. 黒褐色土、LIVブロックが多く落ち、硬小片少し落ちる

第10図 1号土坑、1号焼土跡



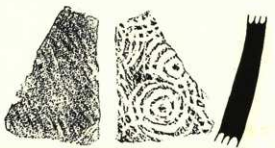
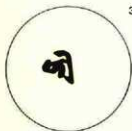
1 弥生土器 (表面採集)



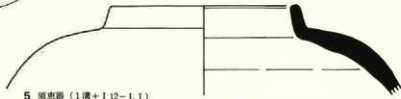
2 弥生土器 (4溝)



3 土師器 (1溝)



4 須恵器 (表面採集)



5 須恵器 (1溝+I12-L1)

第11図 出土遺物

第IV章 ま と め

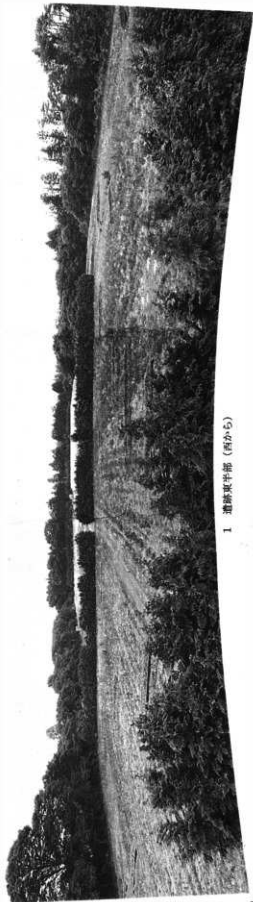
今回の調査では、平安時代以前の溝跡1条、平安時代ごろの溝跡5条、平安時代以降の土坑1基、時代不明の焼土跡1基などが発見された。

平安時代ごろの溝跡は、調査部分に関しては、東西方向の2・3号溝跡と南北方向の5・6号溝跡がほぼ直角方向の位置にあり、1号溝跡も、他の溝跡と対応するような方向を持っている。これらの配置には何らかの有機的な関連があると思われるが、性格を決定付けるような調査事実は得られなかった。

しかし、開発の波が押し寄せる現状にあって、本遺跡周辺での発掘調査例がこれまでにないなか、今回の調査によって、この地域の歴史の一端を明らかにできた意味は大きいと考える。本遺跡の北方1kmの地点には国指定史跡である前方後方墳、桜井古墳が所在し、本遺跡までの間には弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡が多数存在しており、原町市の歴史を語るうえで最も重要な地域であるが、近年の宅地開発などにより、小規模な破壊が続いている。今回の調査が、今後の開発と文化財保護との調和の一助となれば幸いである。

参 考 文 献

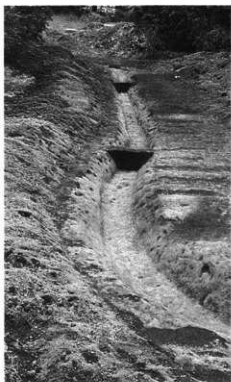
- 1990 原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ 原町市教育委員会
- 1991 原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ 原町市教育委員会



1 遺跡東半部 (西から)



2 遺跡西半部 (東から)



1 1号溝跡東部 (北から)



2 1号溝跡北部 (東から)



3 1号溝跡西部 (北から)



4 4号溝跡南半部 (南西から)



5 4号溝跡北半部 (南西から)



1 2号溝跡西半部 (西から)



2 2号溝跡中央部 (西から)



3 3号溝跡 (東から)



4 6号溝跡 (南から)



5 5号溝跡 (北から)



1 須恵器 短頸壺 (1溝b + I12-L1)



2 須恵器 甕
(1溝北中央部)



3 弥生土器 (H14-L1)



4 弥生土器 (4溝φ1)



5 土師器 杯 (1溝d)



6 磨石 (1溝d)



7 須恵器 圓腹瓶
(M12-L1)



8 須恵器 長腹瓶
(1溝b)

9~11 石鏃
10 (G7-L1)



9 (J17-L1) 11 (101J-L1)



12 石鏃
(17-L1)



13 砥石 (溝北東角φ1)

附 図

原町市埋蔵文化財調査報告書 第9集
(仮称)福島県立浜通り高等技術専門校
建設関連遺跡発掘調査報告書

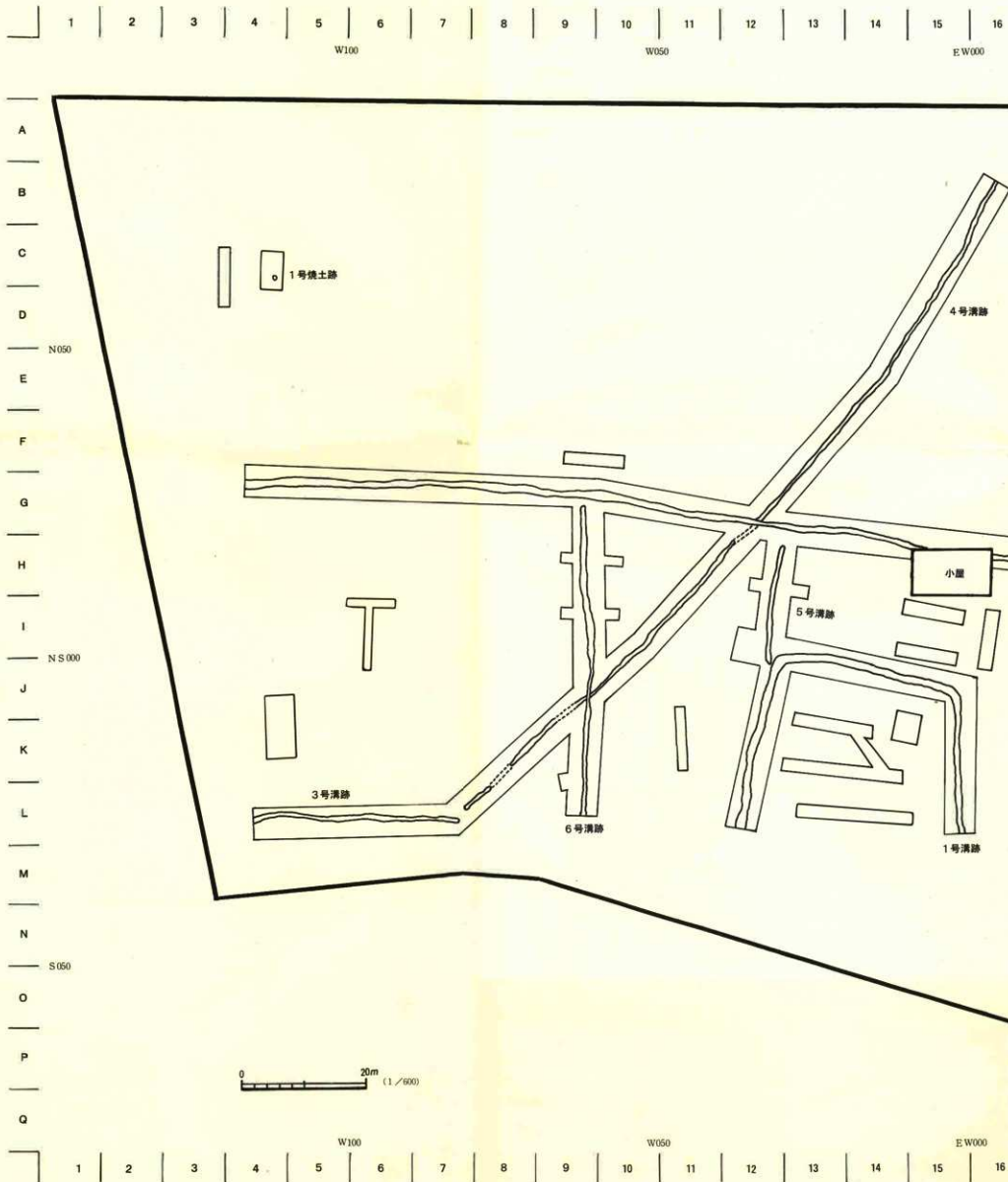
平成5年3月 発行

発行 福島県原町市教育委員会

(〒975) 福島県原町市本町二丁目27番地

印刷 株式会社こはた印刷

(〒975) 福島県原町市東町二丁目99番地



附圖 馬掛場遺跡遺構配置圖

